



診察室の午後

白浜はまゆう病院
泌尿器科部長 川嶋 秀紀

医師の間では、身内の手術はするものではないと言われている。1年半ほど前、義父に腎盂(じんう)がんが見つかった。義父は、血尿が出現したので近くの病院で検査を受けたところ、右の腎臓の、腎盂という部分に、がんを強く疑わせる病変が見つかった。引き続き、右尿管にカテーテルを入れて造影し、そこから尿を採取して細胞の検査をした結果、右腎盂がんであることが確定した。

義父は手術を嫌がったが、私は妻の実家に赴いて説得し、義父を当時私が勤務していた大病院で手術することにした。ありがた

〈15〉 身内の手術

下腹部の腹膜の一部が欠損し腸の一部が見えるし、その辺りが癒着している。そして組織全体がとても脆弱(せいじゃく)である。義父は、長い間デスクワークばかりで、普段運動もしていない。85歳という年齢もあるだろう。癒着や腹膜の欠損は以前の大腸がんの手術の影響だが予想していた

手術の執刀は私で、助手には優秀な後輩医師2名が

よりひどい。内臓「難しい、お義父さんの手術は完遂できないかもしれない」と感じ全身に冷や汗が走った。ひと呼吸置いてから腹腔鏡の術野をゆっくり見ているとアプローチできるところが見えてきた。少しずつつ剝離、切開、展開を始める。手術が無事終了したの

は予定より30分遅れてであった。

手術後の経過は良好で、娘や孫たちが毎日病室に来て一緒に過ごしたのもあり、義父はたいそう機嫌がよかった。そして、「最初はお前たちの結婚にはあまり賛成ではなかったが今はよい婿をもらったと思う」と言ってくれた。私も、一人娘を遠くはなれたところに嫁にもらったことを申し訳なく思っていたし、妻も3人の子育てにかまけてあまり実家を顧みなかったことを気にしていた。

身内ではないが、医学部の恩師の腎臓がんの腹腔鏡手術を執刀したことがある。普段にもまして周到な準備で臨んだことは言ってもない。手術は無事に終わったが、翌日は熱を出し早退せざるを得なかった。